

第2章 銃後

疎開生活③ 「東京から山形県、北海道・寿都へ」

戦争はまだ終わっていない

いわさきしゅういち
岩崎周市さんのお話から

○せん盤工 金属などを切り削る工作機械を扱う仕事。

○疎開 戦争などの危険をさけるために人や物を別の所に移すこと。

○空襲 飛行機で空から地上を爆弾投下などでせめること。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

私が十二歳だった昭和二十年（一九四五年）頃、父の仕事の関係で東京に住んでいました。父は鉄工場のせん盤工をしていましたが、昭和十五年六月頃に家族を残して横須賀や長崎、中国、台湾などへと従軍していきました。

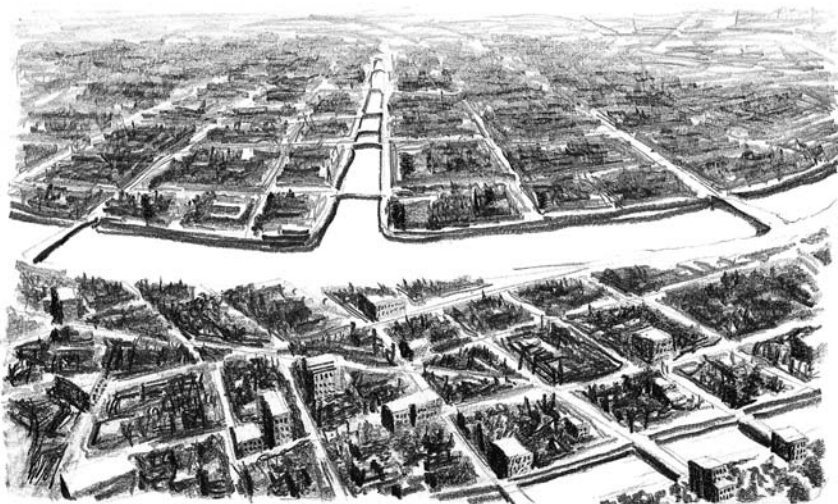
戦争末期になると、米軍による本土爆撃に備え、子どもたちは都外の親戚などのもとへ疎開に出されることになりましたが、私は親戚の家が遠いため、昭和十九年六月学童集団疎開で山形県の新庄町に行きました。新庄町では、大きな料理屋の百畳ほどの広さの部屋に百二十人くらいで集団生活をしました。昭和十八年（一九四三年）十月頃になると東京では毎晩のように空襲があり、空襲警報が出るたびに全員起きて防空壕に避難するという大変な生活を送っていたのに、空襲のない新庄町は、安全にすごせました。また米の産地でもあったので、食べ物にも不自由なく暮らすことができました。しかし、三、四、五年生の小さな子どもたちのなかには、親や家族に会えないさびしさから泣いている子どもたくさんいました。夕食後には、田んぼのあぜ道に集まって、歌を歌って励まし続けました。

昭和二十年三月、小学校修了のために、約九か月過ごした新庄町での集団疎開から東京に戻ってきました。

東京大空襲があった前日の三月九日、私は中学校受験の相談のため、横浜の叔母の家に行きました。実はその日、予防接種を受けたためか微熱があり、行くかどうか迷っていたのですが、夕方になって体調がよくなったので横浜に向かうことができました。もし行くのをやめ

ていたら、空襲くうしゅうにあったことでしょう。家にいた母親おきなと幼い二人の弟は空襲を受けました。家にあつた敷布団しきふとんを頭からかぶって家の近所の「金魚池」と呼んでよいた金魚の養魚池に入り、動かずに一晩中ひとばんじゅう、池の中で水にひたした布団ふとんを頭かぶにかけることをくり返し、九死に一生を得たのです。

空襲くうしゅうの夜には、北からの強風にあおられ、炎上えんじょうする赤い色が横浜よこはまからも近くに見えましたので、「わが家は大丈夫」と東京とうきょうに戻もどることにしました。東京駅とうきょうえきは見渡みわたす限り一面が焼け野原やけのぼらで何もない状況じょうきょうでした。この空襲くうしゅうでは二時間余りで行方不明者ふくを含めると十万人以上が命を落としたといわれていますが、街の中や川には黒こげの死体が至いたる所に転がっていました。死体は、マネキンのように衣服いふくも何もなくテカテカに光っているものや、まるつきり正装せいそうのまままでちっ息したような人などさまざまでしたが、それらを時にはまたいで歩いて自宅じたくに向かいました。自宅じたく近くまでたどり着くと、きれいに焼けていて家は何もありませんでした。近くで焼け跡あとを片付けかたづけていた人に家族あんの安否あひをたずねたところ、千葉県の浦安うらやす小学校に避難ひなんしたと教えられ、ほっとしました。そこで、さらに歩いて浦安うらやす小学校に行ってみましたが行き違いちがいになってしまい会えませんでした。そこでは横浜よこはまに向かったと聞いたので、今朝出発しつぱつしてきた横浜よこはまの叔母おばの家に向かいました。そして



やけ野原になった東京

イメージ図

○横浜大空襲 昭和二十五年五月二十九日に米軍によって横浜に対して行われた空襲。

○B29 第二次世界大戦末期に活躍したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。日本の空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島・長崎への原爆投下にも使われた。

○レーダー 対象物までの距離や方向を明らかにする装置。

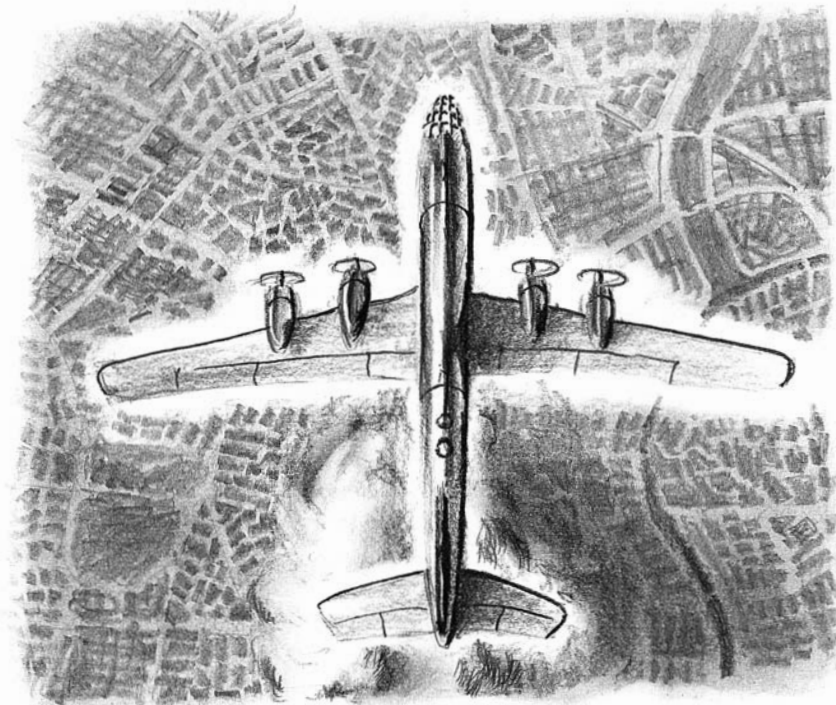
○魚雷 艦船などを爆発によって破壊することを目的とした水中兵器。

てついに家族と会うことができず、焼きこげたようなにおいをずっとかき続けながら、約六十キロメートルという長い距離を歩き続けたのです。

その後、本牧中学校を受験して合格し通学を始めたころ、横浜の叔母の家で暮らし、昭和二十年五月には横浜大空襲にもあったのです。私が住んでいたところは被害がなく爆撃機が通り過ぎるだけでしたが、上空を飛ぶB29が肉眼でも見え、機体から落とされるレーダーをかく乱するための銀色のテープが空から舞い落ちる様子がきれいでした。

この空襲により、通学していた中学校も焼けてしまいました。しかし、山をくりぬいた大きな防空壕を使って授業は続けられたため、毎日山越えをしながら歩いて中学校に通ったのです。

昭和二十年六月になると空襲はさらにはげしくなり、母親の生家があった北海道の寿都に避難することになりました。東京の上野駅発の列車では、立ったままトイレにも行けないぐらいのぎゅうぎゅうづめの状態で青森まで行きました。そこからは爆撃や魚雷攻撃におびえながら青函連絡船に乗って北海道に無事に渡りました。その後私は、北海道庁倶知安中学校に転校し、寄宿舎から通学し



イメージ図

空から攻撃するアメリカ軍 B29

ました。そうして終戦の八月十五日をむかえました。終戦によって安心しましたが、その年は大凶作で食料事情が非常に悪く、毎日食べていたのは、お米が見えないキャベツばかりのぞうすいや凍ったイモなどでした。

俱知安はとても雪が多く、父から送られてきた上等な革靴はよく滑り、全然歩けませんでした。ゴムを打って少しは滑らなくなりましたが、長ぐつのようにはいきません。毎日家に帰ってきたらぬれた革靴を干してはきました。

昭和二十年十二月、台湾に従軍していた父親から、まもなく日本に帰るという便りがあり、父が帰ってくるのを家族で楽しみにしていました。ところが昭和二十一年の三月になって、紙切れ一枚だけの木箱が届けられたのです。父が前の年の十二月二十八日に病気で亡くなったという連絡でした。日本の統治下におかれていた台湾で亡くなった父の遺骨でさえ戻ってこない状況だったのです。

しかし、私たち家族は、六畳一間にリングゴ箱二つの戸棚と布団二組で肩を寄せ合って頑張ったのでした。

太平洋戦争における戦没者は二百四十万人といわれていますが、約半数の百十五万人の遺骨が収集されず、異国に放置されたままという実態に、遺族としても非常にいきどおりを感じています。私は現在も遺族会の活動を続けています。遠い異国の地に父親の遺骨がいまだにねむっていることを思うと、戦場に散っている遺骨が収集されない限り、「戦争はまだ終わっていない」と感じるのです。

DATA

平成20年度西区平和事業

聴き取り

- ・平成20年7月28日
- ・岩崎氏の自宅



.....

岩崎周市(いわさき・しゅういち)さん

- ・昭和8年(1933年)生まれ
- ・札幌市西区在住